



茶道と禅



東洋英和女学院大学人間科学部 教授

岡本浩一 (おかもと こういち)

1985年、東京大学大学院社会学研究科博士課程満期単位取得退学。社会学博士。東京大学助手、東洋英和女学院大学助教授を経て、1997年より現職。(学) 裏千家茶道専門学校理事、裏千家淡交会巡回講師を兼職。専門は社会心理学。著書は『社会心理学ショートショート』(単著、新曜社) など。

いつのまにか、茶道に取り組みはじめて四半世紀になろうとしている。茶道書籍も何冊か上梓したが、さきごろ出版した『一億人の茶道教養講座』は、茶道書としては空前の売れ行きとなっている。茶道の教養的側面に焦点を当てたのがよかったのかもしれない。

茶道を習ってみようと思ったのは、博士論文が仕上がったころだ。自分の研究テーマに集中していた構えをゆるめてみたときに、まず、心理学全般が、自分の学部学生時代と様変わりしていたことに驚いた。「独自性欲求」という狭い研究分野で、専門バカになっていたわけである。心理学概論を学び直すうちに、文化とか教養ということに対しても専門バカになっているのではないかという気持ちが芽生えてきた。ちょうどそのころ、編集者のかたわら、表千家の茶人でもあるという人から、日本文化を最も効率よく知るなら茶道がよいと言われて、習い始めることとした。裏千家にしたのは、祖母や母が裏千家の茶人だったからだ。

茶席は、一碗の茶を供することをつうじて、静かな心持ちを供する営みである。そのためには、自分のなかに静かな心持ちが必要だ。それが、座禅をするようになった動機だ。三代家光が沢庵和尚を開祖として築いた品川の東海寺の座禅会に出るようになって、二十年近くになる。いまは、ここを自家の菩提として、日曜座禅会のお世話をさせていただいている。

茶の湯と禅は、手続にそって心

持ちを調整しようという発想が根源にある。これが、実験心理学と似ていると感じている。

茶の湯をしない人は、茶の湯の点前がひととおりしかないと思っていることが多いが、そうではない。点前には、種類があり、その茶席の主要なテーマがなにかによって区別がある。茶碗がテーマの場合、茶入がテーマの場合、水が名水の場合……などによって点前は大きく異なり、その他、もう少し子細な重点によっても、点前手続が異なっている。客と亭主は、道具組などの制約のなかで、ひとつの手続に乗り、途中で微妙に他の手続のあいだを行きつ戻りつしながら、ひとつの心境を味わう。用意された心景色の風景と、そこでそのとき生じる心景色の交絡が茶席の楽しみであり、実験の実験者と被験者に少し似ている。心理学の実験者は、多くの被験者に同じ手続の実験をしながらも被験者ごとに微妙に異なる経験をし、それによって、心理学者として成長する部分があるが、それと似ている感じがするのである。

座禅も、所作動作の手続によってひとつの心境を目指そうとする。臨濟宗の禅では、数息観という呼吸法の手続にしたがいながら、公案という思考課題を与えられる。公案は、「無字の公案」(イヌには仏性があるか?)か「隻手の公案」(両手を打ったときの右手だけの音が聴こえるか?)と通称されるどちらかを突破して入門し、「無門関」48則、「碧眼録」

100則……ときちんと整えられている。また、禅境の進み方は、「牛(真の自己)を見つけよう」と思い立って旅に出る人の経験に喩えて、それぞれの段階を10枚の絵で示す「十牛図」によって教えられる。実際に禅を行うと、最初は漫画の譬えのようにしか感じられないこの十牛図の順に驚くほど正確にしたがって心境が進むことを経験する。手続の日常的な遵守による成長のカリキュラムが、人間の古い智慧に基づいていることをまざまざと実感するのである。

茶道にしても、禅にしても、やがては、心理学的に、あるいは、非侵襲的な測定によって、その効果や有効性を記述することができるようになるはずだと思うが、その方法の技術的確定は私の生存中には間に合わぬように思われるし、それを考えていると、おそらく、個人としての心境には資しないと思っている。私にとっては、心理学の研究の領域と、茶道や禅の領域とは別個に成立しているほうが機能的なのだと割り切ることにしているのである。

心理学の研究という仕事は、自分の心を拓くことに強く役立つという実感があまりなく、むしろ、一般的な教養、あるいは教養の習得にともなうある種の構えやスキーマの形成が心を拓くことに資すると感じる。それらを「教養的態度」というように定義づけているが、教養的態度と人格成熟の関係をも索してみよう一助として、上のようなことを位置づけている。